

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 高等学校学習指導要領では、外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにすることを目標としていることを踏まえて、4技能のうち「読むこと」「聞くこと」の中でこれらの知識が活用できるかを評価する。したがって、発音、アクセント、語句整序などを単独で問う問題は作成しないこととする。
- 「リーディング」「リスニング」ともに、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）を参考に、各CEFRレベルにふさわしいテキスト作成と設問設定を行うことで、A1からB1レベルに相当する問題を作成する。また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 「リーディング」については、様々なテキストから概要や要点を把握する力や必要とする情報を読み取る力等を問うことをねらいとする。表記については、現在国際的に広く使用されているアメリカ英語に加えて、場面設定によってイギリス英語を使用することもある。
- 「リスニング」については、生徒の身近な暮らしや社会での暮らしに関わる内容について、概要や要点を把握する力や必要とする情報を聞き取る力等を問うことをねらいとする。音声については、多様な話者による現代の標準的な英語を使用する。
読み上げ回数については、英語の試行調査の結果や資格・検定試験におけるリスニング試験の一般的な在り方を踏まえ、問題の数の充実を図ることによりテストの信頼性が更に向上することを目的として、1回読みを含める。十分な読み上げ時間を確保し、重要な情報は形を変えて複数回言及するなど、自然なコミュニケーションに近い英語の問題を含めて検討する。全ての問題を1回読みにする可能性についても今後検証しつつ、当面は1回読みと2回読みの両方の問題を含む構成で実施することとする。
- グローバル人材の育成を目指した英語教育改革の方向性の中で高等学校学習指導要領に示す4技能のバランスの良い育成が求められていることを踏まえ、「リーディング」と「リスニング」の配点を均等とする。ただし、各大学の入学者選抜において、具体的にどの技能にどの程度の比重を置くかについては、4技能を総合的に評価するよう努めるという「大学入学共通テスト実施方針」（平成29年7月）を踏まえた各大学の判断となる。

2 各問題の出題意図と解答結果

本部会では上記の方針を踏まえ、高等学校卒業段階で到達すべき英語力を公正かつ正確に測定する問題作成に向けての検討を継続的に行ってきた。令和5年度共通テストについては、昨年度までに実施した共通テストの結果も踏まえ、問題形式や内容を分析し、各大問で測るべき言語能力を検証した上で、それらの能力を様々な方法で問うことができるよう配慮した。また、実際のコミュニケーションを重視するという観点から、問題の指示文等も英語とした。

第2問のように、概要や要点を把握することに加えて、推測したり、事実と意見を整理したりしながら読む問題、第3問のように、イラストなどの視覚情報を参考にして、概要・展開を把握する問題、第4問のように、複数の情報を読み取り、論理の展開や書き手の意図を把握する問題など、思考力・判断力・表現力等を測れるような問題作成を工夫した。また、試験全体を第1問～第6問の6つの大問で構成することを継承し、セクション数（中間を含む）は10、総解答数49、配点2～3点という構成内容で出題した。本年度の受験者数は463,985人で、昨年度実施した共通テストの

「英語（リーディング）」受験者数480,762人より若干減少したが、例年同様に全科目中で最も多かった。平均点は昨年度の「英語（リーディング）」61.80点（100点満点）より低下し53.81点（100点満点）であった。標準偏差は20.99で、受験者の得点が広い範囲で分散していた。難易度及び得点状況の観点から今回の試験はおおむね適切なレベルであったと言える。また、試験の信頼性、受験者の能力を識別する識別力も高く、全体的にバランスのとれた標準的な問題であった。

第1問 Aは、アメリカに留学中に、教師から配られた2種類の演劇公演の紹介が書かれたプリントについて情報を読み取る問題である。問1は、プリントを読んだ後、何をどのように言われたのか、問2は2つの演劇公演に共通するものを読み取る問題である。どちらの問題も複数の箇条書きの情報を比較・整理しながら、目的に合った情報を探し読みすることを想定する出題とした。Bは、ウェブサイトで紹介されている3つの夏季英語集中プログラムについての文章を読み、それぞれのプログラムの相違点や類似点を把握し、情報を理解する能力を測る。正答率は高いものの識別力も比較的高い問題が多かった。

第2問 Aは、ウェブサイトで紹介されているウォーキングシューズの広告を読み、概要や要点を捉えたり、推測したり、事実や意見を整理したりする問題である。問1はシューズを特徴付ける情報を選択する問題、問2は自分に合ったシューズの魅力は何か、問3～問5は、シューズを購入した顧客の使用感を把握し読み取った内容を活用することを想定している。選択肢の記述内容が事実か意見かだけでなく、条件に合っているかの見極めを要する問題である。Bは、通学時間を有効に使うためのアイデアを得るため、交換留學生が書いたレポートを読み、概要や要点を捉えたり、推測したり、事実と意見を整理したりする問題である。問1は活動の目的を問うもので正確な読み取りを要する。問2から問5は事実と意見を意識しながら読むだけでなく著者の疑問に答えるものを選択する判断力や思考力が求められる問題である。昨年度に引き続きA、B共にイギリス英語を用いたが、違和感なく読めたものと思われる。また、共に十分な識別力のある問題であった。

第3問 Aは、イラストなどを参考にしながら、概要を把握する力を測る問題である。キャンプに行く前の準備について書かれた、クラブのニューズレターを読んでいる場面である。受験者にとっては場面設定や挿絵もあり比較的平易な問題であった。Bは、英国人によって書かれたアドベンチャーームに関するブログを読む。問1は起こった出来事を時系列に並び替える問題、問2は自分のアドベンチャーームを作成する場合に必要なことを読み取り、問3では、この記事から読み取れることを問うている。A、B共にイギリス英語を用いている。正答率・識別力は比較的高く、Bの問2は特に識別力が高い問題であった。

第4問 平易な英語で書かれた2つの記事を比較しながら、情報を理解する力を問う。ここでは効果的な学習方法に関する2つの記事について読む。問1～問3では、2つの記事の各著者の論点や両者の共通点を理解してそれらを整理し、また問4では新しい情報を記憶するために二人の著者の意見が共通している点を、問5では記事の最後に追加すべき内容を推測する問題で判断力や思考力を要する問題である。おおむね正答率も適切で十分識別力の高い問題が多かった。

第5問 平易な英語で書かれた物語を読み、その概要を把握する力を問う。ある男子学生が転校先で卓球を始め、卓球をきっかけとし、教訓を得て自身の問題を克服するという物語を読み、要約ノートに沿って情報を整理する問題である。問1では卓球を始めたきっかけを、問2では主人公の兄の役割を捉え、問3では物語で起こった出来事を時系列に並べさせることを求めることで物語の展開の理解度を問う内容となった。問4と問5は筆者の内面を読み取る問題で、この物語を読んで得られた教訓を解答するものであり、直接は述べられていないことを読み取る力を要する問題である。総じて、正答率は適切で識別力が高い問題が多かった。

第6問 身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する記事を読んで文章の論理展開を把握したり、概要や要点、情報を整理したり、要約する力を問う問題である。Aは、「人は異なった価値を物の中に見出し収集する」ことに関する記事を読み、ディスカッションのためにメモを作成する場面である。メモは導入・事実・収集する理由・収集の未来像に関してまとめたもので、文章全体の論理展開を考えたり、概要を把握したりする力が求められる。Bは、クマムシの生態についての記事を読み、プレゼンテーション用のスライドを完成させる問題である。問1はクマムシについて本文で言及されていないものを正解とし、問2はクマムシの生き残る力の不思議さについて2つの特徴を選択し、問3はクマムシの体の構造を選択しスライドを完成させる問題、問4は最後のスライドに最も適切な選択肢を選び、問5は本文に直接述べられていないが推測できる選択肢を選ぶ問題で深い読解力が求められる。難易度が高い問題となった。

3 出題に対する反響・意見についての見解

各方面からはおおむね肯定的なコメントが得られた。特に高等学校教科担当教員（以下「高校教員」という。）からは、「外国語の語彙や表現、文法、言語の働きなどの知識を、実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて活用できるかを評価するテストとして適切であった」、また「様々なテキストから概要や要点を把握したり、必要な情報を読み取ったりする問題に加え、事実と意見を整理しながら読む問題、課題の解決策を考える問題、複数の情報からそれぞれの要点や書き手の主張等を読み取り比較する問題、情報を整理してまとめたり書かれたことを基に推論したりする問題など、思考力・判断力・表現力等を測る問題となるよう工夫がなされているとともに、幅広い受験者層に対して識別力のあるテストとなっている」など、高い評価を得た。

教育研究団体からは、第2問Bについて、昨年はなかった「事実」を問う問題の出題について、「『事実』を問うということは、正確な読解を基に客観的に情報を区別することが求められるため、思考と判断を伴う問題として好ましい」と、第4問では「2つの資料の関連性を問うとても練られた設問であり、良問であると言える」、第5問では「随筆文から主人公が学んだ具体的な事柄を言わば『抽象化』することが求められており、単なる英文理解ではない良問と言える」など、高い評価を得た。

一方で、高校教員と教育研究団体から要望と提言がなされたのでここに言及する。高校教員からは、概要・要点の把握や必要な情報の読み取りに留まることなく、その先にある書き手の意図を深く捉えたり、自分なりの意見や主張を相手に適切に伝えたりする力も評価できるような問題を出題するよう要望があった。また、出題されたような温かみのある物語文によって、受験者が英文を読む動機となるような問題とするためにも、この出題の方向性は続けてほしいとの要望もあった。

また教育研究団体からは、単に受験者の作業量が増えることによる負荷が増えるような問題は避けるようにとの指摘を受けた。日常生活においては、目的に応じた読み方が求められる。これからはより思考力・判断力・表現力等を測ることができる質の高い問題を作成することが課題となっている。共通テストでは、それぞれの場面設定とタスクに応じたスピードと読む目的を明確にし英語を理解することを念頭に、実践的なコミュニケーション場面において「その場で読み取る」能力とともに思考力・判断力・表現力等を測定する出題が求められていることを強調したい。

4 ま と め

センター試験の「英語（筆記）」同様、「英語（リーディング）」は、全科目の中で最も多くの受験者が受験する科目であり、各方面からの関心が高い。特に、共通テストにおいては、平成21年告示の学習指導要領において育成することを目指す資質・能力を踏まえ、「英語（リーディング）」は、

大学教育の基礎力となる知識・技能の理解を問うのみならず，思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことを重視し，一方で大問ごとにCEFRのA1からB1レベルまで難易度を設定し，幅広い受験者層に対応できる問題構成としている。昨年度よりも平均点は下がったものの得点の分布はなだらかで広く，各設問は高い識別力があることも示された。各大問の指示文では，実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面，状況を設定し，より現実的な場面に即したリーディング問題となったと考える。

リーディングは，たくさんの情報をより多く頭に入れることではなく，それらの情報を頭の中で整理して深く理解し，必要に応じて考え，活用することである。また，テストにおいてたとえ同じ力を測る場合でも，その方法は多岐にわたる。受験者には日ごろから様々なタイプの英文に触れ，目的や場面に応じた問いかけに柔軟に対応できるリーディングの力を付けることを意識してほしい。本問題作成部会のような理念が教育現場に良い波及効果をもたらし，英語のコミュニケーション能力育成に役立てることができれば幸いである。